

---

# 土地神さまと二人の祭り

椿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

土地神さまと二人の祭り

### 【NZコード】

N7974M

### 【作者名】

椿

### 【あらすじ】

ダムの底に沈むことが決まった山奥の小さな村。ひとりまたひとりと住民が去っていくなか、主人公の『俺』が出会ったのは、キツネの耳と尻尾を生やした自称神様の少女だった。

夢か、幻か、蜃気楼か、それとも欲望が生み出した邪な妄想なのか

『俺』に少女が言った

### 「祭りをしよう」

うまれ故郷での最後の冬。『俺』と少女、ふたりだけの夏祭りが始まった

短篇で王道なストーリーなので、気軽に読んでいただけるかと思います。

高校一年生の冬。年も明けて再来月に進級を控えたそんなある日のことだ。

「おおー！よく来たのー！」

1

「嬉しいのうり参拝客なんぞ何年ぶりじゃなか」

- 1 -

俺は生まれて初めてU.M.A.ってやつに遭遇した。でも、これがネッ  
シーやビックフットなら写メでも撮つて週刊誌にでも売り飛ばす  
ところだが、ここは湖でも雪山でもない、ただの古ぼけた神社の境  
内。むちゃくちゃ長い石段をのぼらされた以外は、別に特記すべき  
ことはない。

そして、今俺の目の前にいるのはどう見ても女の子で、小学生の低学年かもっと下か、身長は俺の腰くらいだ。まっさらな銀色の髪を肩まで垂らし、白地に桃色の帯がついた浴衣を着ている。いいところのお嬢様なのか、それなりに似合つてはいると思うが、やはり季節はずれな感じは否めない。ガキっぽい見かけとは裏腹の年齢錯誤激しい『のうじや』口調。で、どのあたりがUMAなのかという

۴

「まあまあ、くうじで行くがよい。茶は出せんがの?」

1

頭の上から生えている耳、銀毛のふさふさしたしつぽがついているあたりだ。本物かコスプレかどうかわからないが、こんなのを撮った日には、幼女をコスプレさせている変態高校生だと思われる」と間違いないし。

というわけで俺は無視することにした。

「あつー、ハーハー向を轟ねりとこしてねー。」

帰らうと背を向けた俺の服を、そこつはむんずと掴んで引き止めた。

服を掴んでいる。

ああ、これで見間違いつてオチが消えてしまったか。あと考えられるのは、と、俺はこの現実を否定するオチをつけるため、必死に頭を動かせながら足を進めるが、

「ゆづくつしていけと言つておひつがー」

「……」

ぐじぐこと腕をひっぱつてくる。が足は止めない。

「それに、神社へ来て何もなしに帰るつもりか！ 賽銭ぐらいい置いてけー！」

「……」

せりに俺の腕を木登りみたいによじ登る。だが足は絶対に止めない。

そしてそのまま頭の上まで登りきり ぬうつと俺の皿の前に顔を出した。

「いじやあー 開いとるのかあああー」

「～～～つだあああああー いつとねしいー」

さすがにここまでされたら我慢できず、俺は足を止め叫んだ。俺の声に驚き、「わわっ！」とバランスを崩したものの、頭にしがみついてなんとか体勢を立てなおす。

「な、なんじゃ？ いきなりわめきよつて」

「うるさいー セつかくお前の存在を完全否定しちゃうんのこ邪魔すんなー つーか下りるー！」

「ケチくさこのうへわらわの柔肌を堪能をせんやひつておるのこ」

と、体を押しつけるように抱きつ いや、しがみつべ。ガキのくせに何が柔肌だ。でも、しがみつかれる感触は本物で、どうやらここには否定しようのない現実のもの。

強引なオチで全面否定していた頭を切り替えた俺は、襟首を掴み

頭から引き剥がした。

「わひやー！」

「こいつ、軽い。まるで風船みたいだ。

「こりあ！ 何をする離さぬか！ 人をペルシャ猫のよつて扱いおつて！ せつ、せつめおぬし……わらわの柔肌に欲情して襲つつもりじやなー！」

じたばたと暴れだす。

いろいろシックミたこといろいろあるが、あえてスルーして俺は叫んだ。

「で、お前は何なんだ？」

「はあ、おぬしは何を言つておる？ わらわは神じや。見てわからんか？」

「見てわからんし、聞いてもひとつわからなくなつたよ」

「ふむ。ならば教えてしんぜよ。わらわの名は月夜。この地を治める土地神じや。おつと、こすぶれなどではないぞ？」

「これでどうだと叫わんばかりに、頭の耳をピカピカと動かしてみせた。

「……」

「ぐうの音も出んよりじやのう？ ほ~れほれほ わひやつ！」

「こいつが神かどうかはわからないが、とりあえずむかついたので手を離してやつた。風船みたいに軽いやつだが、ちゃんと重力にまかせて地面に落ちる。

「いたた……こりー 神を落とす者があるか、このバチ当たりめー！」

「お前が離せつて言つたんだろ？」

「くぬぬうーーはあ、何年ぶりの離じやとこつのこ、こんな無礼な輩が来よるとか」

「悪かつたな」

最初の歓迎ムードはゼビーくやい。丹夜せやべれたよつて半田で言った。

「で？ こりには盗む賛美もなければ、出したやる茶すらない。わ

らわが町つのもなんじゃが、おぬしは何のためにこゝへ来たのじや

？」  
「……

何のために、と聞かれると非常に答えに困ります。

ただなんとなく 学校から帰る途中に、なんとなく道草して、なんとなくいつもと違うルートを通り、そして偶然見つけた長い長い石段をのぼってみたらこゝに辿り着いた ただそれだけのこと。まさか神社があつて、自称神さまの変なガキがいたなんて想像もしていなかつたけど。

俺が何も答えない様子を見て、俺の心中を察したのだろうか、月夜はふうとため息をつき肩をすくめた。

「まあそんなに急いで帰ることもないじや るい」

そう言つて、石段のところに腰を下ろした月夜。

しかしあつきも言つたが、どうも見た目の年齢とのギャップが激しい。大人というよりは年寄りくさい雰囲気を持っている。

神……まさかな。アニメじやあるまいし。

「おぬしも來い。ここからの景色は格別じや

ここに座れど、自分のすぐ隣のスペースをペチペチと手で叩いた。ちよづどい。長い石段をのぼらされて休憩したいと思つていたところだ。

俺は月夜の隣に腰を下ろした。そこからは村が一望できる。まるでガラスケースに入った模型を見下ろしているみたいに。

ここ天海ヶ丘あまみがおか村はそのくらい小さな村なのだ。都会から離れた山々の谷間にひつそりと存在する、村というより集落といったほうがしつくりくる。まわりは田んぼや畑ばかりで家もまばらで、1時間に1本しかないバスで山を越えないとコンビニすらない時代遅れな村。だから余計に、圧倒されてしまったのだらう。俺が知らなかつた、この村の姿に俺は声を失つた。

「綺麗じやらう？ これがおぬしの生まれ育つた村のじやよ」

何十年もそこに立つていて古くさいと思つていた民家も、田植え

を終えたばかりの田園の緑が混ざり合つ景色はなかなか、いやすごく綺麗で、夏間、近所の子供達が泳いでいたやかましい川も、清らかで静かで雄大な姿をしている。

「村は変わらなくて人は変わつてゆく。おぬし達にとつてはつまらなすぎる村でしかないじゃろう?」

心を読む力があるんじやないかと思つてしまふくらいに、月夜が俺の心のなかを言い当てる。

「じゃがいくら時代に合わぬからと言つて、消えてよいということにはならん」

「つ!」

「本当に人は変わつてしまつた。大切なものが何なのかも忘れ、自分勝手に傷つけてしまつ。情けない」

「知つてたのか?」

「わらわは土地神だと言つたである? 知つていて当然じや」

「……そつか」

「ここの景色ももうすぐ消えてしまうのじやな」

そう。この景色、この村は、もうすぐなくなつてしまつ。ダムの底へと消えてしまつのだ。

ダム建設の計画はずいぶんと前からあつたらしい。当然のことながら、村の住民は一斉に反対の声をあげた。

反対派と推進派の連中はお互いに譲る事無く、長い間膠着状態が続いていたのだが、ついに去年、俺たち子供にはわからない強大な力によつて、反対派はあつさりと白旗を振つたのだ。村の住民は絶望して、ひとり、またひとりと村を出ていき、今では人口の1／3も残つてはいない。

茜色を通り越して薄暗くなりはじめた冬空の下、学生としての1週間の業に終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。つーか、やかましそう。スピーカーが古くてイカれているため、大音量＆雑音まじりで耳障りこの上ない。

H.Rも早々に終え、生徒達が我先にと教室を飛び出していく。不思議なことに、生徒つて奴らは教室から昇降口の間にどこからともなく気のあう者同士が集まりだし、校庭に出る頃にはひとつずつグループになつてわいわいと騒いでいるのだ。そのグループが四つ、今俺の前を歩いている。だいたい顔触れはいつも同じ。仮にその内ひとりがいなくなつても、1日2日しゅんと静かになつたあと、またすぐに残つたやつらだけで、変わらずわいわいやるのだろう。実際、別のグループでだが、そういうのを何度か見たことがある。

俺はふと思ひ立つて、後ろを振り返つて校舎を見上げた。横長長方形で焦げ茶色の木肌がむき出しの三階建てに、それと渡り廊下でつながつている同じく木肌むき出しの体育館。ドラマやアニメに出てくるド田舎の学校つてのは、まさにこれのことだ。

1階にある職員室や保健室、その他特別教室を除けば、教室は九つしかない。しかも小中高を全部ひつくるめての数字なので、つまり全学年ひとクラスずつしかないということ。人口が1000人程度しかいないのだから、そつなるのも当然だろ。小1で入学してから高2の今まで毎日通つてきたが、この校舎はもともと古くてボロいからほとんど変わりないよう見える。

俺は校舎に背を向けて帰路についた。

帰り道は、駄菓子屋の前をいつも通ることになる。コンビニがないこの村にとつては、築半世紀越えのこの駄菓子屋がコンビニ一代わりみたいなものだ。事前に注文しておけばそれなりのものが揃う、というよりは取り寄せてくれる。ただしこいつそれが届くかわからないし、絶対に届くという保証もないが。

ちょうど、とある女子のグループが店から出てきたところにはち合わせた。くじがあたつたのどつとのど、小学生みたいにきやあきやあと騒いでいる。ちなみに彼女達は俺の同級一人と先輩二人の三人グループ。れつきとした高校生だ。

グループのひとり、同級の女子が俺に気付いて、じゃあねっと手を振る。彼女のことは知つていて、というより、この小さい村で知

らない顔を見つけるほうが難しい。それなりに整った顔で、誰でもそれなりに接しやすい性格。明るくてかわいいって言ったほうがわかりやすいか。俺は何も反応せず、彼女の前を通り過ぎた。

相変わらず感じ悪いわね と、後ろから聞こえてくる。陰口を叩くのならせめて本人に聞こえない様にしようと思つが、まあそれもいつものことだから気にしていない。

それに、どうせもうすぐここにちらもいなくなつてしまふんだ。そうなれば一生会うこともないだろう

「ふう～満腹じゃ、満足じゃあ！ もう動けんわ～」

月夜は寝転がって腹をポンポンと叩く。そりやあ肉まんを三つも食べばそうなるだろ？

あの日、ここで月夜と出会つてから2週間が過ぎた。あれから俺は毎日、この神社を訪れている。学校が終われば特に何もすることはないし、ここから見える景色が気に入つたからだ。まあ神社なので、供え物のひとつやふたつ持ってきてやつてこむ。今日は駄菓子屋で買った肉まん三つ（一つ + おまけ一つ）。ちゅうど今、月夜が俺の分までぺろりと平らげたところだ。

俺と月夜は石段の上に座つて、景色を見ながらじょもじょもない話をしで日が暮れたら帰る。それがいつのまにか習慣になつていた。

そういえば月夜は何者なのだろう。本人は相変わらず土地神だと言ひ張つているが……まあどうでもいいや。耳が生えてるとかしつぽが生えてるとかしゃべり方が変とか、最近じゃあもうぜんぜん気にならなくなつていた。

「また、誰かが村を出でていったようじや。声が村から遠ざかるのをしてある」

いつもこういう神様っぽいことを言ひだすのもだいぶ慣れた。だから俺は普通に返す。

「ああ、今週だけで三人も転校したらしいぜ」「寂しい話じやのう」

「そうか？ 静かになつてちょっといいだろ」

「冷めどるのう……そんなでは友達ができんぞ？」

「別にいいよ……俺もすぐここを出でいくんだ。そなつたらどうせ、顔も名前も忘れちまつ。他人のことなんて、どうだつていいんだよ」

「……おぬしももうすぐ出ていくのか？」

「ああ」

「どうか、もう転校先は決まつていて、向こうの受け入れ準備が整い次第すぐ引っ越すことになつていて。来月末あたりの予定だ。

「そうか。では最後の思い出に祭りを開かぬか？」

「祭り？ そんなの俺たちだけでできるわけねえだろ？！」

よくは知らないが、祭りを開くにはかなりの金と労力とめんどうな手続きが必要になるつて聞いたことがある。だがこの自称神様は自信たっぷりに胸をどんと叩いた。

「無理なものか。わらわは神じゃぞ？ 不可能などないわ！」

「……」

「なんじや？ 学校の屋上でFOTOを呼んでいる不思議系美少女を発見してびっくり！ でも萌え萌え～みたいな顔をしあつて」

「どういう顔でどういうシチュエーションだよ」

「どうやら、いまいち信じておらんよつじやのっ」

「いまこちどころか、かけらほども信じてねえんだけど」

「うむ、なじばこいらでお主に見せてやらんといかな。おい、ちよこと屈め

「？」

俺は言われた通り、ちよっと中腰になる。すると月夜は俺の額に手をかざし、そしてにやりと笑つた。

「わらわの力をとくと見よ。そりや！」

「（バチッ）うわっ！」

いきなり電気に触れたみたいな痛みが頭のなかで弾けた。でもそれは一瞬で、痛みはすぐに消える。

「な、何したんだよ！」

「力を与えてやつたのじや。祭を開くために、おぬしにまかして働いてもらわんといかんからの」

「ち、力？」

「まあ明日になつてからのお楽しみじや。あまりこすりあわせて腰を抜かすでないぞ？」

ニシシッと笑つ。思わずぶん殴つてやりたくなるよつむかつく笑いだ。

（絶対に何か企んでるな）

と、そんな嫌な予感を抱きつつ迎えた次の日

「おい！ これはどうこうことなんだよー！」

「おおっ！ 予想どおりの反応じやなー！」

「ふざけんな！ お前のしわざだり？ 」の声…」

田が覚めた時から聞こえている奇妙な声。

「痛い……」とか「重い……」とか「苦しい……」とか誰もいなはずの部屋でそれが聞こえてくる。ホラーとしてはベタすぎるネタだが、実際田の当たりにすると洒落にならなくくらい怖い。

「お、お前！ 僕に何をしたんだ！」

「おぬしに与えたのは聞く力。声を持たぬモノたちの声を聞く力じや

「声を持たない、モノたち？」

「おぬしたちが普段『物』と呼んでいる者たちのことじや。奴らにとて心はある。じゃが声を持たぬゆえ、おぬしたち人間には分からぬ。そんな物たちの声を聞き分けるための力じや」

「なんでそんな力を俺に？」

「祭りの材料を集めてきてもらつためじや」

「はあ？」

そして俺は『祭りの材料』とやらを集めに行かされたこととなつた。集め終わるまで力（俺にとっては呪いだ）の効果は消えないなんて言われたら行くしかないだろう。

『そんな難しいことではない。ただわらわが祭りを開くことを伝え、協力してくれる物をここへ持つてきてくれればよい。そうじやのう……十年前から変わらずにいる物がいいかもしれんのう』

「なんのこっちゃ

何がどうなつてゐるのかよくわからないが、まあ十年前から変わらない物なんてこの村には山ほどある。なにせことは、時間が止まってしまったド田舎村なのだか。

「おお！　たくさん集まつたではないか！　『苦労じやつたのう』『祭りの材料』ってやつはすぐに集まつた。祭りとは縁遠いガラクタばかりなのだが。こいつの言つとおりに、何十年もほつたらかしにされている空き家とかで声をかけ、協力してくれる物を手当たり次第に集めてきたのだ。

「うむ。これだけあればよい祭りが開けるぞ」

積み上げられたガラクタを見て月夜は満足そつこつなずいた。これをどうするのかどうか見当もつかないが、ただ気になることがひとつある。

「なあ、月夜？」

「うん？」

「ここの神社で祭りなんてあつたのか？」

そう。俺が声をかけた時、ガラクタたちは『久しぶりの祭りだな』と言つていた。

「ああ、昔一度だけな。そういうえばあれから、もう十年くらいにならぬのう」

「そうなのか？　ぜんぜん知らなかつた」

「当然じや。川の向こうに、どこのその神宮が分社なんぞを造りおつて以来、みんなの心は遠退いてしまひ、この有様じや。おぬしもここのこと、今まで知らなかつたのじやうつ？」

「あ、えつと……わ、悪い」

「気にするでない。今の話はおぬしが生まれるずっと前の話なのじ

や。そんなわけで、おぬしは何年かぶりの客人。そんなおぬしのために、わらわは祭りを開きたいのじゃ」

「けど祭りをやるにしてもどうするんだよ？ 一人じゃ人手が足りなすぎるし、なんか許可とかもとらなきゃいけないんじゃねえのかな？」

「『普通』はな。じゃがそんなものは必要ない。なぜなら 」  
そう言つて、ガラクタの山を前で柏手を打つた。するとパンッと軽い音が響いたあと、眩しい光があたりを包み込んだ。とても田を開けていられない。

「うつ……！」

「なぜならわらわが神だから！ 見てみよ！ これがわらわの力じや！」

田を開けた俺は、その光景に田を見張った。

ここがあの寂れた神社なのか？ 立ち並ぶ出店に漂うやきそばのソースの香り、どこからか聞こえる祭囃子。本当に、今俺の田の前で、祭りが行われていた。

「マジかよ、いつたいどうなつて 月夜！！」

「はあ、はあ、はあ……」

えらそうに自慢するとでも思つていたが、そのまつたく逆で、月夜は苦しそうに息を切らせて蹲つっていた。

「大丈夫か！？」

「あ、案ずるな。すこし疲れただけじゃ。思つた以上に……力が弱まつているよううじやな」

「力が弱まるつて？」

「土地神の力の源は、その地に住む者たちの心。そつじやな……賽銭とか賽銭とか、あと賽銭なんかあれば嬉しいのう」

「全部金じやねえかよ」

「それだけ、みながわらわを必要としてくれておつたのじゃ。それが今では……おぬしが持つてきてくれるお供え物ですこし力が戻つたかと思つておつたのじゃが、ははっ……まこつたのう」

空元気のつもりなんだろ「うけど、その乾いた笑いからは、元気がかけらほども見えていない。さっきまで憎たらしくらい自信満々だったのに 月夜のそんな姿を見ていると、なぜか胸の奥がチリチリと痛くなつた。

「人を、集めればいいんだよな？」

「え？」

「だつたら俺が集めてくる。明日学校で声かけてみんなを集めてくるよ」

どうしてこんなことを言つたのか自分でも不思議なくらいだつた。ただ、何とかしたいと思つたんだ。月夜はあっけに取られた顔で俺を見上げたが、すぐにぷつと吹き出すように笑つた。

「ふふつ……じゃがおぬし、友達おらんのじやう？」

「うつ……べ、別にいないってわけじや……」

「無理はせんでよいぞ？ わらわとおぬしで楽しめばよい」

「だけど、せつかくのチャンスなんだぜ！ 人が集まれば、お前は力を取り戻せるんだろ？」

「ほお？ 一丁前にわらわの心配をしてくれておるのか？」

「そ、そんなんじやねえよ！ とにかく！ 明日、客を連れてくる！ 祭りはそれからだ！」

「ああ、おぬしがそう望むのならそうしょう

「絶対に連れてくるからな！ だから……だからちゃんとこい」「待つてろよ…」

「ああ。約束しよう

「や、約束だぞ！」

俺は月夜に背を向けてそそくさと神社を降りた。火が点いたみたいに顔が熱い 絶対、情けないくらい真っ赤になつてしていると思う。

次の日。俺は石段の前で一の足を踏んでいた。なぜなら、絶対に客を連れてくるという約束を守ることができなかつたからだ。あれだけえらそうに啖呵を切つておきながら一人も連れてこれなかつた。

いや、むしろ誰も俺の話を聞こうとしなかったと言つたほうが正しい。今まで他人を信用せず、冷めた態度をとり続けてきたツケがこんな形で返つてくるなんて。

これじゃああいつに会わせる顔もない。いつそ、もう会わないでおこつか

いや、きちんと謝る。約束守れなくてごめんって。

「そうか。いや、民の心がこの村から離れてしまつてることはどうに知つておつた。じゃが、おぬしの心遣いが嬉しくて……すまん。わらわのわがままのせいだ、辛い思いをさせてしまったのう」

また、俺の心を見透かしたような　いや、知つているのだろうな。

「でも、客が来なきや祭りはできねえし、お前の力だつて「わらわのことは気にせんで良い。それに客ならちやんとあるではないか」

「えつ、うわつ！？」

「今宵はわらわとおぬしの祭りじゃ！　存分に楽しもうではないか！」

月夜が俺の手を取つて走りだす。

『わらわとおぬしで楽しめばよい』

ああそうか、初めからこいつは俺のために祭りを　自惚れかもしけないが、それでも嬉しかった。だから思い切り楽しもう。そう思つた。

焼そば、いか焼き、りんご飴、射的、くじ引き、金魚すべりと懐かしい定番の出店が並んでいる。店の人がいないのに、食べ物や景品はなくならず食べ放題の遊び放題だ。不思議なことだけど、そんなこと気にならないくらい、俺は祭を楽しんでいた。

そういうえば祭りなんて何年ぶりだろう？　すごい懐かしい感じがする。

ドーン　出店をひと通り廻り終わつたあたりで大きな音が聞こえてきた。その音の正体は夜空に咲く大輪の花。打ち上げ花火だ。

「やはり祭りの締めといえばこれじゃよ！」

この時期に花火？ なんて常識も忘れてしまつくらい、冬の寒空に咲くこの花に心を奪われていた。

「冬の花火も悪くないな……あれ？」

デジヤブか……前に同じような台詞を聞いたことがある気がする。でも、いつどこで？

「このような花火は好きでないか？」

「えっ？」

「浮かぬ顔をしてあるように見えるのでな」

「ち、違う違う！ ちょっと驚いてただけだ！」

「そうか。おぬしの好みがわからなかつたので、もしかしたらと心配しておつたのじや」

「……」

「この花火は俺のために また顔が熱くなつてきた。なんでこいつは、俺のためにここまでしてくれるのだろう。」

いつもの場所に腰掛けてしまらく花火を眺めていると、火薬音に混じつて人の声が聞こえてきた。それも大勢の声 石段の下あたりから聞こえているみたいだ。見てみると、そこには村の人たちが大勢集まっていた。みんな、花火を見に来てくれたのだろう。

「月夜、見てみろよ！」

「ん？」

「村のみんなが来てくれたぜ！ 俺、呼んでくる！」

「待て」

月夜が、みんなのところへ行こうとした俺の手をつかむ。だけど俺の手をつかんでいるのは、あいつらしくない、白魚のように細くなめらかな指。

俺は驚いて振り返った。するとそこにいたのは、銀色の髪をした

女性 本来の姿を取り戻した月夜がそこにいたのだ。

「もうよい……これで十分じゃ」

彼女は笑った。とても寂しそうに。俺はとっさに彼女の手を握り返した。細い指が折れてしまうくらい強く そうしないと、彼女

がこの世界から消えてしまうんじゃないかと思ったから。

そして、祭りが終わって数週間後。俺が村を出ていく日がついにやってきた。転入先の学校から、受け入れの準備が整つたと連絡があつたのだ。

「行くのか？」

「ああ」

「そうか」

彼女は幼女の姿に戻っている。人が集まつたのはあの花火の時だけで、みんなの心がこの神社に向けられることはなかつた。結局、俺は彼女に何もしてやれなかつたのだ。

「なあ？　お前は

「達者でな。運がよければ、また出会えるかもしけんのう

「えつ？　あ、ああ……

「その日のために……」には、笑つて別れようではないか！

「……ああ」

俺は短く答えると、彼女に背を向けた。

言いかけた言葉

『お前は、村がなくなつたらどうなるんだ？』

その答えを確かめられないまま。

そして彼女の、今にも泣きそうな笑顔の意味を確かめないまま

村を出てから三ヶ月が経つた。俺は今、首都圏のある町で暮らしている。進級してこいつちの学校にも慣れてきて、このあいだ新しいバイトを始めたところだ。今は親と別々に暮らしている。だからバイトをしているのは生活費を稼ぐため。

母さんから仕送りもしてもらつていて、できればこれには手をつけたくない。俺と母さんのあいだには深い溝がある　というよりは、俺が一方的に拒絶しているだけなのだが。

俺の両親は三年前に離婚をした。原因は家庭内暴力。田頃から母さんに対してもふるわれていた暴力が、ついに子供の俺にまでエスカレートしたことで、俺と母さんは逃げるように家を飛び出した。そ

れが十年前のこと。それから親戚を頼つて7年が経ち、ようやく離婚が成立し、財産分与で与えられたあの家、あの村に戻ってきた。だが、あの男はダム建設の計画を初めから知っていたに違いない。自分の親ながら、なんて最低な男なんだ。

そして、そんな最低野郎と7年間も離婚しないでいた母さんのこと  
も俺は許せなかつた。理由を聞いてもただごめんなさいと言つて泣  
くだけ。母さんのことは嫌いじゃないのだけど、気持ちの整理をつ  
ける時間がほしかつた。

そんな母さんから今日電話があり、とつとう俺たちの家の取り壊しが始まるそうだ。だから最後に見に行かないかという誘いだつた。でも俺は行かないと答えた。特にあの家に思い入れもないし、まだ母さんと顔を合わせられるほど整理ができない。

だけど、そんな電話があつたせいだろうか、俺はその夜に夢を見た

夢と云ふよりは、小さい頃のことを思い出した。

『これ童。今日も泣いておるのか？ ビービーと泣いている暇があるのなら、わらわと遊ばぬか？ ん？ わらわか？ わらわは土地神、神様じゃ。とてもえらいのじやぞ？』

『今日は祭りをしよう。何を言つ? 夏に祭りをしてはいかんとい  
う決まりはあるまつ? まかせろ。わらわは神じや。不可能などな  
い』

『これ引っ張るでない。そんなに急がなくとも祭りは逃げたりせぬ。焼そばも、いか焼きも、りんご飴も、なんでも遊び放題じゃ』

『花火？ 確かに冬の花火というのもなかなか乙なもの。ではさつ  
そく ん？ ほう、母上と父上として楽しかったと？ それはぜ  
ひ、わらわもしてみたいのう。明日持つてきてくれるのか？ そう  
か……ああ、また明日じゃ ああ、またここで遊ぼう 絶対じ  
や、約束しよ』

「つー！」

なんで忘れていたんだろう。俺は彼女に会っていた、いや、彼女と約束していたんだ。

「俺が約束を忘れていたから、あいつは……」

「俺が約束を忘れていたから、あいつは……」

力が弱まつて、あんなに小さな姿になつてまで

神の力の源はその地に住む者たちの心

それじやあ、村に人がいなくなつた今、あいつは

居ても立つてもいられなくなつた俺は、朝一番で家を飛び出した。ここから村までは電車をいくつも乗り継がなければならぬ。始発を捕まえることができれば、なんとか昼前には辿り着ける。そう思つていたのだが、あと一歩のところで想定外の壁が立ちふさがつていた。

「廃……線？」

村へと向かう唯一の線が廃線になつていたのだ。そもそもこの線は村と近くの街を往復するための線なので、村がなくなれば当然廃止になる。

背筋に冷たいものが走つた。唯一の入り口がなくなつた、つまり、村には人がいない。

神の力の源はその地に住む者たちの心

俺は走つた。

電車で2時間以上かかる距離。そんなの走つてなんとかできるものじゃないことくらいわかつていい。でも、今の俺にはこの方法しかない。一秒でも早く彼女のところへ辿り着かないと、という想いが俺を突き動かした。

だけど、現実はそう甘くない。アップダウンの激しい山道は俺の体力を削りつけ、とうとう限界を越えてしまった。2時間？ 1時間？ 30分？ どれくらい走ったのかはわからないが、ただひとつわかるのは、まだ半分も進めていないということだ。

「はあつ……はあつ……くつ、くそお！」

涙が出てきた。約束を守らなかつたどころか、彼女を止めることさえできなかつた自分が情けなくて。

『だ れるのに……』

その時、どこからか声が聞こえた。男とも女とも聞こえる中性的な声。まるで、頭のなかに直接流れ込んでくるように。こんな人気のない山道で、普通なら頭がおかしくなつたんじやないかと思うところなのだが、この感覚には覚えがあつた。まだ残つていたのか、彼女からもらつた、物の声を聞く能力が。

『まだ、走れるのに』

声の聞こえるほうを見ると、そこにあつたのは不法投棄された自転車。俺は生まれて初めて、奇跡つてやつを信じてしまった。

本人（？）いわく、どこも壊れていなし、ただちょっと錆びているだけで十分に走れるとのこと。俺はこいつに最後のチャンスを託した。

俺は全力でペダルを漕いだ。やつぱり走るより段違いに速い。だが悪路仕様になつていないうこいつじゃ相当きついだろう。ペダルやタイヤが文字通り悲鳴を上げている。それでも俺は、こいつには悪いが、立ち止まるわけにいかなかつた。

「あきらめるわけにいかねえんだ……ここのあきらめたら、俺は一生自分を許せなくなる！だから頼む！ 力を貸してくれ！」

こまま走り続ければ壊れてしまうかもしれない。俺のわがままに無理矢理付き合わされて、こいつにとつてはいい迷惑なはずだけど、これは氣のせいだろうか、ペダルがすこし軽くなつたような気がした。

タタタツ

子供らしい軽快な駆け音が遠ざかっていく。月夜は、少年の小さな背中が階段を下りて見えなくなるまで、ずっと見送っていた。

「また明日……じゃな」

ぱつりとつぶやいた月夜の顔は、寂しそうに眉をひそめていた。だがすぐ、その感情にかぶりを振る。

「ばかばかしい。何百年と生きてきて今更……さて、片付けるとするか」

月夜は境内のほうへ振り返った。役目を終えて灯を落とした屋台たちが残っている。

「ごくろうであつたな、おぬしたち。有事の際はまた力を貸してくれ」

そう言って月夜が柏手を打つと、周囲を淡い光が包み込み、光がおさまる屋台たちは消え、見飽きた境内の景色がそこにあつた。彼らは元ある場所へと帰つていったのだ。人の手を離れ、何年も放置されたモノとして。

「ゴミを集めてお祭騒ぎとは。相変わらず暇でうらやましいな」

声のほうを振り向くと、金色に輝く公家風の衣裳を身につけた男が立っていた。月夜は半田になり「ふん！」と鼻を鳴らす。

「相変わらず貴様の口からは嫌味しか出てこんようじやの、なりきん成金め「成金つて言うな！」

「貴様こそ彼奴らのことをゴミなどといつな。そもそも暇なのは貴様がこの村に来たせいではないか」

「まだそんな昔の話を根に持つているのか？ 本当に暇なのだな」「やかましい！ 親の七光の分際で！ 年がら年中キンピカしあつて鬱陶しいわ！」

神である月夜をいろいろとさせたこの男も、同じくこの地にすむ神である。彼は全国でも名の知れたとある神の息子で、親がまつらされている神社の分社としてやってきた。いわゆる生まれついてのヒート。かたや月夜は長生きした狐が神格化した名も知らない一介の神だ。村人の心が、この成金神に向いてしまうのは当然の結果だろう。

男はやれやれと首を振り話題を変えた。

「あの子供、よくここに来てくるようだな」

「ああ。最近は毎日来てるよ」

月夜は本堂の階段に腰掛け、つこさつきまでここで少年と話をしていたことを思い出し表情を緩めた。だが男は険しい表情をしている。

「忘れたか？ われら神は？」

「ああ、知っているとも。神は人の生業なりわいに干渉せずただ見護ること

を楽しみとし、また役目とする。じゃがあやつはわらわに会うためにここへ来ておる。求める者には施しを与える。それも神の役目であろう？ 貴様の社の賽銭箱、あれはただの飾りだと言つかの？」  
にたりと嫌味たつぶりの笑みを浮かべる。今度は男のほうがいらっしゃる番だ。

彼のいらついた顔を見て満足したのか、月夜は「んん~！」とわざとらしく伸びをした。

「今日はちと疲れた。そろそろ床につくとしよう。おい、成金。用がないのなら早よう帰れ。まさか夜這でもするつもりか？」

「……この村はダムの底に沈む」

「ああ、そういえばそんな話があるよ。じやの。まあわらわにほどうでもよいことじや。ふあ~」

くだらないとばかりに大きなあぐびをした月夜。だがその時

『いたい！ いたい、やめてよ！』

「……」

頭のなかで響くその声に、月夜は身を強ばらせた。

「どうした？」

どうやら男には聞こえていないようだ。

『やめて！ やめてよお父さん！』

これは偶然なのだろうか。月夜にだけ聞こえるこの声は間違いなくあの少年の声だ。

そういえば、両親がよくけんかをしてくると、少年が話してくれたことがあった。

だがそれが、夫から妻への家庭内暴力のことだつた。そして今、ついに父親がわが子にまで手を擧げるようになってしまったのだ。

「くつ！ 今すぐ止めなくては！」

しかし バチツ

駆け出した月夜の体は、階段手前で、見えない壁によつて阻まれた。

「なにつ！ 結界？！」

疑問符を浮かべる月夜に、男が冷静な口調で言つた。

「神は人の生業に自ら干渉してはならない。求める者にだけ施しを与える」

「だから今助けに」

「あの少年は、お前に助けを求めているのか」

「つ！」

「これは、あの少年の声がお前に聞こえているだけにすぎない。助けを求めていることにはならない。よつて、神であるお前は、あの少年の元へ行くことは許されない」

男の言つことは、残酷ではあるが正しかつた。現に月夜は、この境内から出ることすら適わない状況にある。だが、月夜は納得できなかつた。

「なぜじや……あの子がこんなにも苦しんでいるといつて、こんなにも泣いているといつてのに！ 何もしてはならんなど……こんな馬鹿なことがあるか！」

そして、月夜は神あらざる行動に出た。神の規律を正すためにあるこの結界を破ろうと挑んだ。力と力が拮抗しあい、だが結界の外敵を拒絶する力のほうが上回つており、月夜の体を傷つけていく。

「何をしている月夜！ やめないか！」

「大切なものを守れずに何が神じや！ そんな神ならわらはいらぬ！ ジヤから……ジヤから行かせてくれ！ あの子を助けに行かせてくれ！」

男の言葉など届いてはいない。月夜には、少年が苦しみ泣いている

声しか聞こえていなかつた。どんなに傷つけられようとも、彼女は前に進むことをやめない。何度も何度も、少年の名を呼び続けながら。

今から十年前の、ある冬の夜の出来事だ。

俺が村に着いた時には、もうすっかり日が暮れてしまつていた。ほとんどの家屋は解体されていて、宵闇のなか、作業車の化け物みたいなシルエットだけが浮かび上がつてゐる。

物たちの声がまったく聞こえない。何もかもが死に絶えてしまつたみたいに静かだ。俺は急いで神社に向かつた。もしかしたら、神社も取り壊されているかもしれない。そんな嫌な予感を頭から振り払い、俺は這うように、相変わらずあほみたいに長い石段を駆け上がつた。そしてなんとか登りきり、俺は力の限りに彼女の名を叫んだ。

「月夜ー！」

返事がない。それでも俺は何度も叫び続けた。

間に合わなかつたなんて、そんな結末を認めたくなかったから。

『ここ、だよ……』

声が聞こえた。男か女か判別のつかない中性的な声。本堂の方から聞こえる。きっと本堂そのものが彼女の居場所を教えてくれているのだろう。

「つ！」

本堂へあがる階段のところに何かがある。小さくて白い 小さ

な白狐が横たわつていた。間違いない月夜だ。

「月夜！ 月夜！ おいー！」

「つ……おお……おぬしか……」

彼女は苦しそうに目を開きいつもの姿に戻つたが、その輪郭はぼやけ薄くなつっていた。

「なんじゅ……またビーベーと泣いておるのか？ 男のくせに情け

ないの」

「月夜……」「めん。俺……約束、ずっと」とおれって

「それは違うぞ？ おぬしは何も悪くない」

「えつ？」

「あの夜……あの祭りの後、おぬしに何があったのか、土地神であるわらわが知らぬと思つたか？」

「つー？」

あの田は俺にとって、最高の幸せと最悪の絶望を同時に味わった日だった。最高の幸せは、月夜と祭りを楽しめたこと。そして最悪の絶望は、あの男が俺に暴力を奮い、俺と母さんが家を逃げ出したことだ。

「おぬしこうして、忘れてしまいたいへりこつりこ記憶じやうりつだから、おぬしは悪くない」

「違う……」

「神とは道を示す者。人の進む道を示し、人が歩んでいく姿を見護ること」が役目であり、幸せでもある。わらわもそう思つておつた……じやがあの夜。おぬしが苦しんでいるのに、泣いてくるところに！ わらわはなにもできなかつた！ 神などと偉そうなことを言つておきながら、おぬしを助けることができなかつた！ それは神だからとこうのなら神などいらぬ……」そのまま朽ち果ててしまおつと思つたのじや

「何言つてゐるんだよ…………」

「消える前に、もう一度おぬしに会えてよかつた……願つてもない」とじや

「…………やめろよ」

「ああ、ぬきなきこ。わらわのことはもう忘れ

「ふやけんな！」

話を聞いていると頭がカツと熱くなつて、そして俺は月夜の頬を思いきり叩いていた。

「」のまま朽ち果ててしまおうと思つただの、自分のことは忘れる

だの……勝手なこと言つてんじゃねえよ！……原因を作つたのは俺なんだろ？ だつたらなんで俺をもつと責めなかつた！ 俺が約束を守らなかつた、忘れちまつてたせいだつて！

「違う！ おぬしには関係ない」

「関係なくない！」

俺は彼女の手を取つた。

「一緒にこい！」

「えつ……？」

「居場所が必要なんだつたら、俺がお前の居場所になつてやる！ 俺がお前にこと見てる！ だから……だから消えるな、消えないでくれ！」

「…………つー！」

突然、まばゆい光が目の前を覆つた。いつかの時のような光。だけど以前とは違う。ひだまりみたいな、温かい光だ。

そして光が晴れた時、彼女はそこにいた。俺の思い出のなか、あの日一緒に花火を見上げた時の、本来あるべき姿で。「い、こんなことが……？」

初めて見たかもしれない。自信過剰でえらそくな月夜が、こんな、あつけに取られた顔をしているのは。そして

「は、はは……まいつたのう……こんなのは初めてじや……ははつ涙と、そして最高の笑顔を、見ることができた。

帰り道は当然自転車だ。すっかり力を取り戻した月夜が、なんかワープみたいな術を使ってやると言つていたが、俺はそれを断つた。

「では、月でも眺めながらゆっくり帰るとしよ」と、月夜が月を見上げながら言つた。走る自転車。

俺がペダルを漕いで、彼女はその後ろで荷台に腰掛けている。

「なあ、月夜？」

「ん？」

俺は背中ごしに声をかけた。

「帰つたら、花火しよう。昔、約束してたやつ

「つむ、やはりあの打ち上げ花火は違つておつたか  
「あんなでつかいの、普通の家じゃやらないって。まああれはあれ  
で綺麗だつたけど」

「それで、約束の花火というのは?」

「線香花火。あれに比べたら、かなりしょぼいけど」

「そんなことはない。おぬしと一緒にする花火なのだと?」この世  
の何よりも美しいに決まつている」

「…………」

「Jのシチュエーションでこのセリフは反則だ。ていうか、さつき  
まで通えるだのどこのとか言つたのはどJの誰だよ

「……あつ」

「うん?」

「いや。何でもない」

今、母さんがあの男と7年間も離婚しなかつた理由がわかつた気  
がした。

(そつか。母さんもあきらめたくなかったんだ……)

「やっぱ親子か……」

「今度はどうした? 急に笑つたりして」

「いや、ちょっとな」

明日にでも母さんに電話しよう。今度の連休に帰るつて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7974m/>

---

土地神さまと二人の祭り

2010年11月14日22時11分発行